

Milton の英雄観

野呂有子

Milton の英雄観と一口に言っても、これは非常に大きな研究課題であり、様々な問題を含んでいる。又、青年時代と壮年期、老年期では、その内容にも自ずと違いが出てくるであろう。本稿においては、内乱の末期から共和制確立の時期までに書かれた“Sonnet XV” (1648)、“Sonnet XVI” (1652)、*Second Defense* (1654)、の三つの作品を取りあげて、これらの作品の中に現われた Milton の英雄観を考えて行こう。

(I) “Sonnet XV” について

清教徒革命の議会側の軍事指導者として活躍した Fairfax 卿 (1612-1671) は、1648 年 6 月 2 日に Maidstone で Kent 州の王党派を破り、残党の立籠った Essex 州の Colchester に向かった。6 月 13 日に包囲された町は、同年の 8 月 27 日に陥落した。一方、Cromwell は、Charles I と謀り共謀して北部から侵入した Scotland 軍を、8 月 17 日に Preston で撃ち破っていた。かくして、Charles I の策略は再び失敗し、立ち直る機会を永久に失われた。

Milton は、「Colchester を包囲する最高司令官 Fairfax 卿に宛てて」と題した sonnet を詠んでいるが、¹ これは通常“Sonnet XV”と呼ばれている。この詩には臨場感が溢れており、又、その題のために、包囲の期間に詠まれたという説が有力である。²

革命の最盛期に、時の最高司令官に向けて詠まれたこの詩を基にして、Milton の英雄観を探っていくのが本稿のねらいである。ここに、問題の詩を引用する。

TO THE LOAD GENERAL FAIRFAX AT THE SIEGE OF COLCHESTER

FAIRFAX, Whose name in arms through Europe rings

¹ この sonnet は、Cromwell への sonnet と共に、1673 年に出版された *Poems* にはのせられていない。最初に現われたのは、Milton の甥、Phillips による『ミルトン伝』(1694)の中にあるが、ケンブリッジ・マニユスクリプトの中に発見され Newton がこれを写筆した。

² cf. John Carey and Alastair Fowler, eds., *The Poems of John Milton* (London: Longmans, 1968), p.321. 更に、John S. Smart は、*The Sonnets of John Milton* (Glasgow: Maclehouse, Jackson and Co., 1921), p.84 において、詩中のスコットランド軍侵入の記述が現在時制であることを捉えて、まだ Cromwell はスコットランド軍を撃ち破っておらず、従って、詩は 8 月 17 日以前に書かれたとしている。

Filling each mouth with envy or with praise
And all her jealous monarchs with amaze
And rumors loud that daunt remotest Kings,
Thy firm unshaken virtue ever brings
Victory home, though new rebellions raise
Their Hydra heads and the false North displays
Her broken league to imp their serpent wings.
O yet a nobler task awaits thy hand
For what can war but endless war still breed?
Till truth and right from violence be freed
And public faith cleared from the shameful brand
Of public fraud: in vain doth Valour bleed,
While Avarice and Rapine share the land.³

訳

フェアファックスよ、武人としてのあなたの名はヨーロッパ中に
鳴り渡って、1人1人のその口を嫉妬や賞賛で満たし
警戒に目を光らす専制君主すべてを驚きと口やかましい
風説とで満たし、それは最果の国の王どもをも恐れさす。
あなたの堅く揺るぎない徳はいつも母国に勝利を持ち帰る
たとえ新たな反乱がヒュードラの鎌首をもたげ、その蛇の
翼に羽をつけ足す為に、不信実な北国が
破られた同盟を広げようとも。
ああ、しかしより崇高な使命があなたのその手を待っている。
なぜなら戦は終りなき戦の他何を産み出し得ようか。
信実と正義とが暴制から解き放たれ、国民的名誉が
国民的汚辱という恥ずべき烙印を拭われるまでは、

³ Harrap's English Classics の E. M. W. Tillyard and Phillis B. Tillyard, eds., *Comus and Some Shorter Poems of John Milton* (1652; rpt. London: George G. Harrap & Co., 1975) をテキストとした。“Sonnet XVI”も同様。それ以外のミルトンの詩作品については Carely をテキストとする。

勇氣はただ徒^{いたずら}に血を流す

貪欲と強奪とが国土を共有するその間は。

Fairfax 卿への呼びかけで始まる詩は、J. H. Finley の言葉を借りれば、呼びかけられたその人は「業績により叙述され…後には詩の要点である助言が続く。⁴」という構造を持っている。「Fairfax の名前に続く四行では、彼の戦いにおける功績の記述があり、それは賞賛を込めた語りかけを含む次の四行を通じて引き継がれていく。sestet において、Fairfax は、戦いの為に集められた議会の負債を埋め合わせ、勝利は揺るぎないものとするよう勧告される。……octave は叙述に sestet は勧告にあてられている。……この詩においては、呼びかけは意見と織り合わされ、Milton は賞賛者から鑑定者・予言者へと立場を移動させている。⁵」

詩に見られる「賞賛から訓告へ」というレトリックは、Finley の指摘通り、テーマと関連して重要な問題であろう。これは、又、Milton の他のいくつかの sonnets にも共通して指摘される問題である。⁶

しかしながら、引用された Finley の言葉を、我々はそのまま受け入れる事はできない。具体的な説明の中に、正確さに欠ける部分があるからである。彼の論の不正確な面を追及し、詩全体の構造を再考する事から、「Milton の英雄観」という問題の解決の糸口が見出されるであろう。

詩を分析するにあたって Finley が、sonnet 形式に付随する octave と sestet という構造に基づいている事は明らかである。二部形式に則つての「賞賛から助言へ」という見方も、大筋においては間違いではない。しかし、第一行から第八行までを、大まかに、octave にまとめ、「ここでは業績が叙述され賞賛されている。」と言い切る事で、彼は一つの事を見失っている。それは、「詩人の視点の方向」とでも言うべきものであろう。

厳密に言えば、第1行～4行では、戦いにおける Fairfax の業績が描かれているのではなく、武人としてのその名が国外にまで鳴り渡っている様子が描かれているのだ。戦いの功績については、次に続く四行（第5行～8行）で初めて言及されている。この二つの事が混同されるのを避けてか、詩人は、第一行の“whose name”を主語とする文は四行目で終

⁴ J. H. Finley, “Milton and Horace” *Harvard Studies in Classical Philology*, *xlvi* (1937), pp.40-41.

⁵ *Ibid.*, p.41.

⁶ *loc. cit.*

結させて、第五行からは“thy...virtue”を主語とする文を新たに書き起こしている。第1行～4行、第5行～8行のそれぞれの四行は、押韻の単位としてだけでなく、意味の上でも独立した単位として考えるべきであろう。

octave - sestet という区分では説明しにくい問題がもう一つある。それは、第六行から描かれる支配的な詩的イメージが第十行まで持続するという事である。これについては、少し詳しく論じてみよう。

英国ルネッサンス期において、大神 Jupiter の子 Hercules は、神の子 Christ の prototype としてしばしば扱われている。⁷ この事は、Milton においても例外ではなく、“Nativity Ode” (1629)、*The Tenure of Kings and Magistrates* (1649)、“Sonnet XXIII” (1658?)、⁸ *Paradise Regained* (1671) の中にその例を見る事が、D. C. Allen らによって明らかにされている。⁹ そして、我々が、今取り扱っている詩の中にもそのイメージを見る事ができる。

“new rebellion”は、革命派に対して、各地で戦いの狼煙をあげた王党派を、“the false North”は、王と密約を交わして「厳粛なる同盟と契約」(the Solemn League and Covenant)¹⁰ を破り (“broken”) 北から英国本土に侵入した Scotland を指す。彼らの様子は、「新たな反乱がヒュードラの鎌首をもたげ、不信実な北国がその蛇の翼を繕う為に破れた同盟を広げ」として描かれている。“hydra”は九つの首（五から百まで説はわかるが）を持つ竜に似た怪物であり、内乱をこの怪物に譬えるのも珍しい事ではなかった。¹¹ そして、これを倒すのが Hercules の “twelve works” の一つである事は良く知られている所である。

敵対する王党派と Scotland を Hydra のイメージで描くことによって、詩人は、Fairfax 卿に Hercules のイメージを重ねて行くのだ。更に、第五行の “virtue” を形容する “firm, unshaken” という形容詞は、「信仰において揺ぎなく、あらゆる誘惑にも微動だにしない。」

⁷ Carely, pp.112-1164; M. Y. Hughes, “The Authors of the Faerie Queen”, *Études anglaises*, vi (1953), pp.193-213; *John Milton: Paradise Regained, the Minor Poems and Samson Agonistes* (New York: The Odyssey Press, 1937), p.429; “The Christ of Paradise Regained and the Renaissance Heroic Tradition”, *Perspectives on Milton* (New Haven: Yale Univ. Press, 1965), pp.52-53; J. T. Krouse, *Milton's Samson and the Christian Tradition* (New York: Octagon Books, 1974), p.130.

⁸ “Sonnet XXIII”の製作年代については、これが最初の妻 Mary Powell に宛てたものであるか二番目の妻 Catherine Woodcock に宛てたものかで議論が分かれる所だが、ここでは伝統的な見方に基づいて後者を取った。

⁹ “Milton and the Descent to Light”, *JEGP* lx (1961), pp.619-21.

¹⁰ 1643年イングランドとスコットランドの両議会の間で結ばれた長老制擁護を約した盟約。

¹¹ A. W. Verity, ed., *Milton's Sonnets* (Cambridge: Cambridge Univ. Press, 1916), p.48.

という意味を内包して、*Paradise Regained* の Christ を形容する語である。Christ は Satan のような様々な誘惑にも拘らず、“Stoodst / Unshaken” である。¹²

Hydra のイメージは、八行目で一旦文が終結し、次の行に強い調子の文が導入される事によって消失したかに見える。しかし、続く十行目は、明らかに、Hydra のイメージを内包していると言えるだろう。“war” は、第4行～8行で見た“hydra heads”を思い出させ、“endless” は、切るごとにその頭が倍、倍と増して行くのに通じ、“breed” は、鳥や蛇が卵を孵すその様子を彷彿とさせる。

以上で明らかのように、戦いを hydra とし、それを撃ち破る Fairfax 卿を Hercules とするイメージは、octave、sestet という区分を越えて、詩全体に支配的なイメージとして広がっていく。Finley の言う、octave、sestet に基づいての「賞賛から助言へ」という二部構造だけでは、詩を理解する上で充分とは言えない事はこれで明らかであろう。

私は、“Sonnet XV” は、基本的には三層の構造を持つと考える。（第1行～4行、第5行～8行、第9行～14行）これを今、それぞれ、第一部、第二部、第三部と呼ぶ事にする。その根拠として、次のことが挙げられる。

第一に、それぞれの部が、音韻単位としてだけでなく、独立した文として、意味の単位として成立しているという事であり、これについては既に上で述べたので、改めて説明の必要ないであろう。

第二点として、我々は、詩の中に、Fairfax 卿に属する三つのものを見る。それは彼の「名」であり、「徳」であり、「手」である。ところで、これらの語は、漫然と詩の中に散りばめられているのではない。それぞれの部の第一行目に中心的な語として据えられているのだ。第一部、第二部では主語として、第三部では目的語として。更に、この三つの語は、それに前置された所有格（whose、thy、thy）のゆえに、言及される度に、詩の冒頭の“Fairfax”という語へと戻っていくのだ。

第三に、先程触れた「詩人の視点の方向」が問題となる。以下、この点について詳しく論じて行こう。

第一部において、Fairfax の名は、ヨーロッパはおろかはるか彼方の国々にまで轟き渡って行く。嫉妬と賞賛が入り乱れながら、警戒に目を光らせる専制君主を脅かし、その噂は遠方の諸国にまで伝わっていく。ここでは彼の名が、まるで水が流れるように澱みなく、外へ外へと広がっていく様子が見事に捉えられている。このような効果をもたらす要素の

¹² PR. iv. 420-421.

一つは、“rings”、“filling”等の動詞に内在する「広がる」というイメージであろう。音韻的には、[r]、[l]、[m]の音の効果であり、統語的には、この部が、“and”や“or”など対立を示さぬ接続詞や、「いくらでもその後へ付けて文を無限に続けて行く事のできる」性質を持つ関係詞よりなる一文であるという事であろう。

第二部になると、“brings home”という語の働きにより、世界の果てにまで想像の羽を伸ばしていた読者は、英国内に引き戻される。そこでは、Fairfaxの勇気が常に勝利を収めるのだ。たとえ、後から後から新たな戦いが起ころうとも。Fairfaxと敵との文を結ぶ“though”という逆説の接続詞は、その緊張関係、対立関係を示すのに効果的である。押韻においても、Fairfaxを叙述する“brings”が、内へ向かう意味を持っているのに対し、敵方を叙述するのに使われる“raise”、“displays”、“wings”という語が、外への広がりを感じさせるのも面白い。

広い世界から、国内の戦いの場へと引き戻され、戦いの雄大なイメージに酔っていた読者に、詩人はぴしっと言う。「いやいやもっと崇高な使命があなたの手を待っているのだ」と。第三部の冒頭である。ここで言及されるFairfaxの「手」とは、勿論、1645年の王の軍を大敗させたNasebyの戦での彼の行為を意識しての事であろう。彼は軍の先頭に立って戦い、自らの「手」で王党派の軍旗を掴んだのだ。

それでは、革命の為の戦いにおいて誰よりも勇猛果敢であった彼の手を待つ「より崇高な使命」とは何だろうか。それは、「真実を暴制から解放し、国民的誉れから国民的汚辱を拭い去る」事である。具体的には、前者は信教の自由の問題を指し後者は議会派の経済的混乱を指す。

Massonの『Milton伝』（1965）は、1648年3月に議会では長老派が、「異端の悪習に浸る者には死罪を与えよ。」という法案を可決したと伝えている。Miltonは、この法は信教の自由を脅かすものであると考え、自分を“truth”に見たて、長老派の暴挙を“violence”と呼んでいるのであろう。¹³ 更に、戦争費用を捻出するとして、王党派の土地・財産は没収されたり、重い罰金を課せられたりしたが、それに乗じて議会派の中には、権力を利用し、自己の勢力増大、金儲け、私的復讐を謀る者が少なくなかった。¹⁴ 特に長老派は、軍が王党派と戦っている間に、議会内での勢力を伸ばし、軍の要求を無視し続けた。彼らは、

¹³ A. S. P. Woodhouse and Bush, eds., “The Minor English Poems” (1972), *A Variorum Commentary on the Poems of John Milton* (London: Routledge & Kegan Paul; New York: Columbia Univ. Press, 1970-), vol. II, 414, Gen. ed., M. Y. Hughes.

¹⁴ Verity, p.49.

Scotland と同じように、王と取り引きして、その助けをもとに独立派を押えようとさえした。¹⁵ 現に、独立派の軍司令官が、長老派から多数を占める議회를、戦争基金流用と王党派からの収賄のかどで告発したとも報じられている。¹⁶

“public faith” とは、「国民的榮譽」という普遍的な意味とは別に、当時、議会在議派の人々から募った一種の国債を意味した。Milton 自身も、この「国債」に財産のほぼすべてを貸与しており、返還を申し出たが拒絶されたとある。¹⁷ つまり、第三部における Milton の怒りは、単に英国民を代表しての怒りだけではなく、Milton の個人的な深い憤りをも含んでいるのだ。その怒りの強さは相対立する文や語を重ねる緊張した構成や、対照的な語、“public faith” と “public fraud” を文頭に並べる事や、特に終りの四行で、[p, b, t, d, k] という破裂音や [f, v, j] 等の摩擦音で音韻的效果を促す事で、全体として怒りを吐き出すような強い調子にしている事からも窺える。

Fairfax 卿のなすべき「より崇高な使命」とは、議党派内部にいて中から共和制を虫蝕む敵を一掃する事に他ならない。彼らは共和制を口に、神の名の陰で私利私欲を恣のままにしている敵なのだ。

A Variorum Commentary は、「ここで言及されているのは議会在議員であって長老派聖職者の野心的貪欲さではない。」としているが、¹⁸ 詩人が、議会の混乱の核として、最大勢力を持つ長老派を見据えているのは間違いないであろう。

我々は、Fairfax 卿への sonnet において、詩人の視点が内へ内へと向かっているのを知った。第一部では、英国国外、ヨーロッパばかりか遙るか彼方の国々までがその視野にある。そこでの Fairfax 卿の敵は、専制君主であり諸王であった。第二部では、それが英国内に狭められ、王党派や Scotland が彼の敵である。それが第三部になると、焦点は、議党派内部、共和制を叫ぶ者達の集団内にまで絞られる。敵は内部にもいるのだ。しかも、外の敵ほど倒し易く、内部の敵ほど倒しにくいのだ。外の敵は Fairfax 卿の名を聞いただけで怯えあがるが、内部の敵は強力で、武力を持ってしては打ち破れない。それを撃ち破る事は、戦場での数々の武功よりもはるかに“崇高な使命”なのだ。

ここに我々は、Milton の英雄観を垣間見た思いがする。彼にとって「より英雄的な行為」

¹⁵ 大野真弓編、『イギリス史』、「世界各国史」（東京：山川出版社、1955）、vol. I, 144 - 118.

¹⁶ A. R. Weekers, ed., *Milton: The Sonnets* (London: W. B. Clive), p.34, n. d.; W. Bell, ed., *Milton's Lycidas, Sonnets, etc.* (1919), p.164, n. p.

¹⁷ *A Variorum Commentary* vol. II, 414.

¹⁸ *Ibid.*, 414.

とは、専制君主を破り、戦いで武功をあげる事ではなく、内部の敵を打ち破ることなのだ。しかもそれは武力では片付けられない、つまり武力以上の力が要求されるがゆえに、より英雄的なのだ。

先に Hercules のイメージの問題について言及したが、そのイメージが octave から sestet にまたがっていても、少しも奇妙でないのも、やはり詩人の「内へ内へと向かう視点」の為であり、Finley の言う、「賞賛から訓告へ」という構造では説明し切れないであろう。

第三部を要約すると次のようになるであろうか。「より崇高な使命があなたを待っている。なぜなら、正義と真実が暴制から解き放たれ、名誉が汚辱の烙印を取り除かれるまでは、いくら戦ったところで、また新たな戦いが産まれるだけである。戦いの大もとである悪が野放しになっているのだから。」

つまり、「hydra の頭」—戦い—は、切られても切られても一層多くはえて来るのであって武力で押えても、それは一時的なことにしか過ぎないのだ。ここで、詩人は、Hercules が Iolaos の助けを得て、首を切ったその後に火を放ち、二度とはえぬよう抜本的対策を講じたそのように、Fairfax 卿にも抜本的対策を勧告しているのだ。時制がすべて現在形で書かれているこの詩は、今まさに Hydra に戦いを仕掛けようとする英雄を描いているともとれよう。そして Milton は、第二部においては、今まさに始まらんとする戦いを指導しているともとれないだろうか。その意味では、この詩は、未来に向かって可能性の開かれた、動的な価値を持つものとなっている。

内なる敵を倒す事、さもなければ、又、新たな敵が議会派内部から現われるであろう。かつて、同盟を結び王を共通の敵とした Scotland が同盟を破って戦いを仕掛けて来たように。

（Ⅱ）“Sonnet XVI” について

戦場よりもむしろ議会内に居る敵、内なる敵を倒す事がより英雄的な仕事であるとする Milton の主張は、Cromwell（1599-1658）にあてて書かれた sonnet の中に、一層明確な形で打ち出されている。これは、「総司令官 Cromwell 殿にあてて、1652年5月、福音普及委員会（“the Committee for Propagation of the Gospel”）の、ある聖職者達の提議に関して」

と題され、¹⁹ “Sonnet XVI” と呼ばれている。

「福音普及委員会」は同年の2月10日に召集されている。この委員会は、聖職者の有給制度化と信教の自由の制限を主な議題とするものであった。18日には、Cromwell 付の牧師である John Owen (1616-83) と独立派の聖職者達が、長老派系の国営教会を設立し、それに付随して聖職者達を有給制度化し、それ以外の宗派の伝道活動に制限を加える事を提議した。そして4月29日には、議会で、聖職者の給与確保のために十分の一税を当面続けていく事が決まった。²⁰ ここにおいて Milton の怒りは爆発したに違いない。教会を国営化する事は、取りも直さず宗教への政治の介入に他ならない。そして、聖職者の看板をぶらさげて宗教を食いものにする輩を国が認めるとは。信教は個人の選択に委ねられるべきものであるのに、これでは Charles I の統治時代と同じ事ではないか、というのが彼の怒りの内容であろう。²¹

TO THE LOAD GENERAL CROMWELL
ON THE PROPOSALS OF CERTAIN MINISTERS AT THE COMMITTEE FOR
PROPAGATION OF THE GOSPEL

CROMWELL, our chief of men who through a cloud
Not of war only, but detractions rude,
Guided by faith and matchless fortitude,
To peace and truth thy glorious way hast ploughed,
And on the neck of crowned Fortune proud
Hast reared God's trophies and his work pursued,
While Darwen stream, with blood of Scots imbrued,
And Dunbar field resounds thy praise loud,
And Worcester's laureate wreath: yet much remains
To conquer still; Peace hath her victories
No less renowned than War: new foes arise,

¹⁹ 註1を見よ。

²⁰ *A Variorum Commentary* vol. II, 417-419.

²¹ *Ibid.*, 419.

Threatening to bind our souls with secular chains.

Help us to save free conscience from the paw

Of hireling wolves whose gospel is their maw.²²

訳

クロムウェルよ、我らの首長^{おさ}よ、あなたは戦の雲の中から
だけでなく荒々しい中傷の雲の中からも
信仰と比類無き勇氣とに導かれ
平和と真実へと誉れある道を切り開いてきた。
そして王冠を頂いた高慢な運命のその首に
神の勝利の記念碑を築き上げ、神の務めに従ってきた。
一方ではスコットランド人の血に染められたダーウエンの流れが
そしてダンバーの野が、ウースターの月桂樹の冠が
あなたへの賞賛を音高く鳴り響かせているが。が、しかし、
多くの事が依然として征服さるべく残っている。
平和というものは戦いに劣らず、その勝利を名高くさせるものだ。
新たな敵が起こって、我々の魂を世俗の鎖に繋ごうと
脅かしている。我々を助けて働われ狼どもの爪から自由な
良心を救いたまえ、やつらの福音とはその胃袋なのだ。

第1行～5行においては業績が叙述され、第6行～9行（前半）で、彼が勝利を得た戦場の名が列挙され、第9行（後半）～14行で、さらに彼の成すべき事が訴えられているこの詩は、“Sonnet XV”と形式的にも語句の上でも共通のものを多分に含んでいると言えよう。

しかし、注目すべきは、Fairfax 卿の成し得なかった事をしたという点で Cromwell を称えている事であろう。彼は、戦いだけでなく、又、中傷に打ち負かされる事もなく「信仰と忍耐とに支えられて平和と真実への道を切り開いた。」“detraction rude”とは、王を処刑した事についての王党派からの様々な批判・攻撃を指す。更に、“the neck of crowned fortune”は、斬首刑に処せられた Charles I と、1650年に Scotland で即位したその息子 Charles II を暗示しているのだ。

²² 註3を見よ。

1648年の夏、内乱に一応の終止符が打たれてから、議会は急速に王処刑へと傾いていった。12月6日には、Pride's Purge がなされ、²³ 翌年1月には戦争責任者としての王の裁判が行われた。しかし、Fairfax 卿は陪審員に選ばれていながら裁判出席を拒み、王処刑に反対する態度を見せた。そして、Prince of Wales（後の Charles II）の不穏な動きに対し、総司令官として Scotland へ攻め込むようにという議会の要請にも従わず、彼は公職から退いてしまう。1650年6月25日のことであった。

これに対し、Cromwell は、1649年1月30日に王処刑を断行し、様々な中傷にも拘らず、1650年9月3日には Dunbar で Scotland を破り、翌年の同じ日に Worcester で Charles II に圧勝したのだ。

このように Fairfax 以上の戦いを戦った Cromwell にも、「しかし多くの人は平和時に成される事よりも戦時になされる事の方が重要だと考えるかもしれないが、戦時に劣らず有名で重要な業績が成されたという例は今までに沢山ある」のだし、²⁴ 内政の安定と指導者自身の節制という「困難な使命に比べれば、戦争など単なる遊戯に過ぎない」のである。²⁵

そしてこの内政の安定という「より崇高な」戦いにおける敵は、宗教の自由を圧迫する国営教会の確立と神を食いものにする聖職者達であり、背後で画策する長老派である。第6行～8行で列挙されている戦場の名がすべて Scotland との戦いの場である事は、その意味で重要である。長老派は外からだけでなく、内からも共和制を蝕もうとしているのだ。実情としては、スコットランドの長老派とイングランドの長老派が内通し、必要に応じて結託していた。

Finley は、この箇所について、戦場での武勇伝を列挙していくのは Horace 以来の伝統であると指摘しているが、²⁶ むしろ重要なのは、Milton が、そのような戦場での武勇伝というものをむしろ超えるべきものとして扱っているということであろう。内なる敵との戦いに勝つ事は、武人として戦場で手柄をたてる事よりも「はるかに崇高な」使命なのであるから。

(III) *Second Defense* と Fairfax

²³ 1648年12月6日 Thomas Pride 大佐（? - 1658）が Charles I と妥協した議員約100名を武力をもって下院から追放した事件。

²⁴ Cicero, *Of Duties*, I. xxii. 74.

²⁵ 『第二弁論』、*Complete Prose Works of John Milton*, vol. IV, 674, Gen. ed., Don M. Wolfe (New Haven: Yale Univ. Press, 1953-).

²⁶ “Milton and Horace”, p. 60.

前章でも述べたが、Fairfax 卿は国王処刑に反対し、それを契機として公職を退いた。“Sonnet XV”で Fairfax 卿に求められた議会内の改革は、完遂されるどころか、着手される事もないまま放置された。Fairfax 卿は武勇の誉れ高い、すぐれた武人ではあったが、思想的には迷いがあり、又、政治的指導者としての資質には恵まれていなかったのだ。つまり、彼は、昔ながらの英雄の型を越えて Milton の描く英雄たり得る事はできなかったのだ。

Milton は、王処刑に反対した者達を非難している。²⁷

しかし、Milton の Fairfax 卿への言及はそれで終わったのではない。ある意味では、彼の英雄観・叙事詩観の集大成とも言える『第二弁護論』（1654）の中で、²⁸ 彼は、Fairfax 卿を通して英雄像を更に発展させている。

Fairfax 卿への言及は Cromwell のものと比べると極めて短いものであるが、そこには Milton の英雄像がはっきりとした形で描かれている。彼は、「至高の勇気と至高の慎みと至高の神聖さ」とを兼ね備えて居り、「敵を打ち破ったばかりでなく」古今東西のあらゆる秀れた人物も、その誘惑には屈してしまう「荣誉への欲望、野心をも撃ち破った」人物として称えられている。²⁹

我々は、1648 年の Fairfax 卿への sonnet の中に既に征服すべき敵を求めて内へ内へと向かう Milton の姿勢を見出している。そして、内なる敵に勝つ事は、外の敵に勝つよりも「いっそう英雄的な」行為なのである。となれば、最も英雄的で最も試練に満ちた戦いとは、個人の内部での戦いに他ならない。そして、この戦いにおける敵は、「荣誉を求める野心」である。Milton は Fairfax 卿を、この戦いにも勝利を収めた英雄として称えているのだ。Fairfax 卿は、「老 Sipio Africanus のように…勇気と崇高な行為の報酬を飛び越えて、あらゆる苦勞と人としての行い—たとえ最も偉大な行いでさえも—のたどり着く所である、最も喜びに満ち最も誉れある隠遁の生活へと入っている」のだ。³⁰

Robert W. Ayers は、Milton の Fairfax 卿への賛辞は心からのものであるにせよ、誇張に過ぎるとしている。³¹ しかし、『第二弁護論』が「イギリス国民のため」と同時に、「Cromwell の Load Protector 就任を暗に諫めるという、Cromwell に対してさえ didactic な立場に立って、

²⁷ David Masson, *The Life of John Milton*, (London: Macmillan, 1859-94. Gloucester: Peter Smith, 1965), vol. IV, 70.

²⁸ A. Arai, “Milton’s *Defensio Secunda*”, *Otsuka Review*, 5 (1968), pp.3-9.

²⁹ *Complete Prose Works*, IV, 669.

³⁰ *Ibid.*, 669.

³¹ *Ibid.*, 669.

執筆」されたという見方を取るならば、³² Fairfax 卿への賛辞が、ただ誇張されたものであるという以上に、重要な意味を持って来るのは明らかであろう。革命期において同じように活躍した Fairfax 卿と Cromwell であるが、その後の生き方はまったく対照的であり、前者が、「榮譽を拒否して」隠遁の生活に入ったのに対し、後者は次第に自由を脅かしてくる体制の、名実ともに第一人者になろうとしているのだ。Milton 中の Cromwell を諫めようという気持ちが強ければ強い程、Fairfax 卿がより完成された英雄として、「誇張」と思える程に描かれるのはむしろ当然といえるかもしれない。³³

Milton は、王政復古（1660 年）後、逮捕され、財産を没収されたが、からくも処刑は逃れ、釈放後は隠遁生活を余儀なくされた。そのため、否応なく自己の文学探求の生活に入る事となった。甥たちの記録するところでは、彼は失明し、理想の共和国が瓦解しても、陽気で快活な隠遁生活を送っていたという。彼は口述筆記を通じて、大作を次々と形にしていた。この時期の Milton の脳裏には、自分が『第二弁護論』における Fairfax 像造形を通して練り上げた「英雄的な生き方」があったのではないだろうか。Milton には、地上的な榮譽を受ける事なく、「至上の喜びと誉れに満ちた隠遁の生活」を実践している、という矜持があったと考えられるのである。

註で言及されなかった参考文献

Milton's Sonnets. Ed. E. A. J. Hanigmann. London: Macmillan, 1966.

Stoehr, Taylor. "Syntax and Poetic Form in Milton's Sonnets". *MP* xLv (1964), 289-301.

National Biography

『ミルトン研究』十七世紀英文学研究会編。東京：金星堂、1974。

『ミルトンとその時代』平井正穂編。東京：研究社、1974。

『イギリス文学詩文選』斎藤美洲編。東京：中京出版、1973。

大木英夫、『ピューリターン』1968；再版。東京：中公新書、1978。

³² Arai, p.7. 尚、Ayers は、「Fairfax を老 Scipio Africanus にたとえるのは余りふさわしくない、なぜなら後者は、武勇の誉れは高いが、不正が明らかになって隠遁生活に入らざるを得なかったからである」と述べている（*Prose Works*, IV. 669.）が、事實はそうであっても、Cicero も Scipio を英雄として扱ったし、Milton の時代にも、行動と思索の調和のとれた真の英雄の型として扱われていたと、Frank Kermodé, "Milton's Hero", *RES* iv (1953), p.320 で明らかにされている。

³³ 現実の Fairfax 卿は、王政復古に際して中心的役割を果たし、再度、国会議員にも選出され、国王から手厚い庇護を受けている。